

明代中後期江南における隠逸思想の空間的表現 ―「世捨て」と「入世」の二面性―

中谷礼仁研究室
後期ル・コルビジェとその弟子たち ゼミ
1X19A038-4 何 楽遥

■ 目次構成

- I 序論
- 第0章 本研究について
 - 0-1.はじめに
 - 0-2.研究背景
 - 0-3.研究目的
 - 0-4.研究対象とその定義
 - 0-4-1.研究対象
 - 0-4-2.定義
 - 0-5.研究方法
 - 0-6.既往研究と本研究の位置付け
 - 0-6-1.既往研究
 - 0-6-2.本研究の位置付け
- II 本論
- 第1章 文人画と文徴明
 - 1-1.はじめに
 - 1-2.文人画と文人空間の関係性
 - 1-2-1.文人画の記録性
 - 1-2-2.文人画の超越性
 - 1-2-3.文人画の指導性
 - 1-3.文徴明とその作品
 - 1-3-1.創作動機
 - 1-3-2.継承と伝承
 - 1-3-3.特徴
 - 1-3-3-1.自然客体と文人主体
 - 1-3-3-2.人の活動に注目
 - 1-4.小結
- 第2章 隠逸思想と隠逸空間
 - 2-1.はじめに
 - 2-2.隠逸思想の起源と発展
 - 2-3.隠逸思想の哲学背景
 - 2-4.自我の発見と「草堂」の誕生
 - 2-5.小結
- 第3章 文徴明の作品からみる隠逸空間
 - 3-1.はじめに
 - 3-2.資料編
 - 3-3.対象作品による要素の抽出と整理
 - 3-3-1.空間を構成する要素
 - 3-3-2.建物の種類
 - 3-3-3.空間の配列と使い方
 - 3-4.小結
- 第4章 拙政園からみる隠逸空間
 - 4-1.はじめに
 - 4-2.図冊と遊記
 - 4-3.拙政園について
 - 4-4.文徴明と拙政園
 - 4-5.拙政園の変遷と連続性
 - 4-6.考察項目の決定
 - 4-7.『拙政園三十一景図冊』からみる隠逸思想
 - 4-8.創作背景
 - 4-8-1.『拙政園三十一景図冊』と『王氏拙政園記』の商品性
 - 4-8-2.『拙政園十二景図冊』の主観性
 - 4-9.『拙政園三十一景図冊』と『拙政園十二景図冊』との比較
 - 4-10.小結
- 第5章 隠逸思想の空間的表現
 - 5-1.世捨て
 - 5-2.入世
 - 5-3.葛藤
- 結論

■ 序論

第0章 本研究について

○研究背景

隠逸文化の発祥は中国の上古時代までさかのぼり、自身の品性を磨く行為として、各時代の文人たちに憧れていた。社会背景の変化に従って、各時代における隠逸の特徴は少しずつ変わったものの、その本質はそれほど変わらなかった。つまり、その根本にある「**世捨て**」の**思想**として、俗世とのつながりを絶ち、人里の離れた山の中に姿を隠して身を修めることを意味し、人間から「神聖性」を求めていたことは変わらなかった。そして**明代中後期に入り、社会の経済面・政治面などからの激しい変化により、隠逸に新しい意味合いが込められた。**

○研究目的

本研究の目的は、**明代中後期の江南を対象に、隠逸思想の特徴とその空間的表現を明らかにすることである。**隠逸思想と隠逸空間との関係性を調査することで、明代中後期における文人空間の理解の一助になることを目標とする。

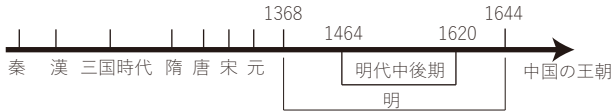


図1.中国古代年表

○研究方法

- ①文献調査により、文人画と文人空間の関係性について分析する。そして、文徴明^[1]の作品の特徴を分析することで、研究対象として取り上げる妥当性を確認する。(1章)
- ②隠逸思想の発展を通史的に整理し、その定義に影響する要素について考察する。また、明代中後期における隠逸思想の特徴を明らかにする。(2章)
- ③文徴明の作品の中から研究対象となる作品を選出し、隠逸空間における空間構成の特徴について分析する。(3章)
- ④拙政園とそれにまつわる作品に着目して、第3章から得た結果を検証するとともに、より大きいスケールから隠逸空間の空間構成について分析する。(4章)
- ⑤第4章までの情報を踏まえて、隠逸空間を構成する要素と隠逸思想との関係性について考察し、隠逸思想の空間的表現を明らかにする。(考察)

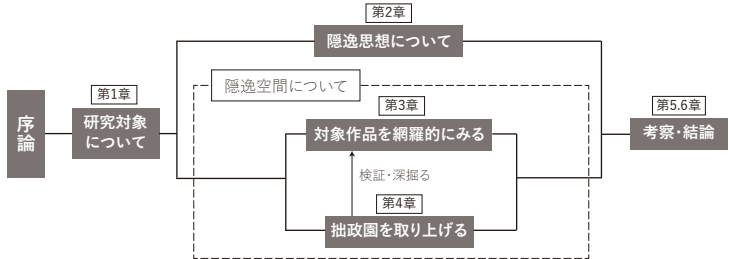


図2.研究方法

0-5.既往研究と本研究の位置付け

0-5-1.既往研究

<隠逸空間について>

・季嘉穎「文人園林中的“隠逸”空間研究」湖南大学建築学院,2021.

<明代の文人画と文人空間について>

・クレイグ・クルナス『明代中国の庭園文化』青土社,2008

・張琳・金秋野「基于明代文徴明詩画的茶空間研究」風景園林文化艺术与美学,2021

<隠逸思想について>

高智「六朝隠逸詩研究」上海師範大学,2013

[1] 明代中後期の江南一帯で活動していた文人であり、明代中後期を代表する人物であると言われている。

0-5-2.本研究の位置付け

既往研究の多くは魏晋南北朝時代と唐宋時代に焦点をあてていた。また、それらは文人空間そのもの、もしくは隠逸思想に着目して行われていたものの、両者の関係性についての研究は少ない。さらに、その関係性について触れた研究は、隠逸思想の「高潔さ」だけに注目して、**思想の多面性**を軽んじる傾向があった。

本研究では、明代中後期の江南を対象として、より**全面的に明代における隠逸思想の特徴を把握**したうえで、それが**どのようにに空間構成に反映されていたのか**を明らかにしたい。

■ 本論

第1章 文人画と文徴明

現存する明代の建築は清代に改修され、本来の姿をなくしてた。建設当初の様子を研究するのに、当時の人が残した書画を取り上げる。本章では①文人画と文人空間の関係性を分析する②文徴明の作品を主な研究対象として取り上げる妥当性について確認する。本論文の研究対象について以下のことを明らかにした：

○文人画と文人空間の関係性

中国古代建築には「意境」の言説がある。「意」は主観的な感情を意味するのに対して「境」は客観的存在である実空間を指す。文人画はその芸術的な表現形式として、実空間(境)に作者の思想(意)を融合させた産物であり、実空間に対して**〈記録性〉〈超越性〉**を持つ。

また、設計図が普及されていない明代において、名家の作品を参考にして空間を設計する場合が多い。よって、文人画は空間設計に対して**〈指導性〉**を持つ。

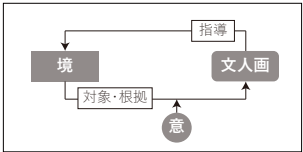


図3.文人画と文人空間の関係性

○文徴明の作品

文徴明は、明代中後期の江南文人を代表する人物であり、**大量の作品を世に残した。**彼は創作を通して「雅」と「俗」を分けようとしたものの、社会の変化が一番激しい時空間に生きていたため、その作品は**当時の思想と文化をからの影響をうけて、その様相を反映していた。**また、彼の作品は**人と空間の関係性に注目している**特徴が挙げられる、本論文にとってふさわしい研究対象であると考えられる。

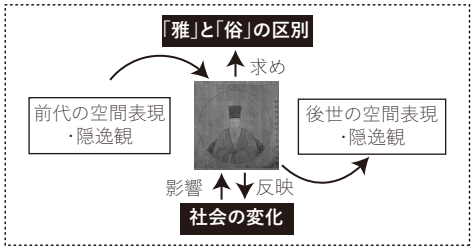


図4.文徴明の人物像

第2章 隠逸思想と隠逸空間

第2章では、明代中後期までに隠逸思想の変化を通史的に整理し、その定義を決めた要素について分析した。その結果を以下にまとめる。

各時代における隠逸行為の動機・隠逸思想の特徴に影響する要因として、**〈哲学思想〉〈社会制度と文人の政治的地位〉〈経済状況〉**があげられる。

それらを明代の時代的背景と照らし合わせて分析を行う。

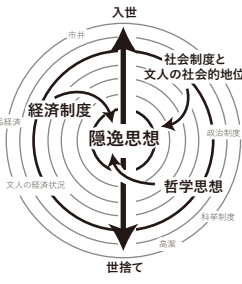


図5.隠逸思想に影響する要素

〈哲学思想〉

明代中後期における哲学思想の基盤として儒家・道家・莊禪があげられる。それらの教えは古来の「隠逸」の定義づけに寄与していた。〈社会制度と文人の政治的地位〉
明代の皇帝は集権体制を強めるために、治国の才能を持つのに国に仕えない文人を罪人扱いしていた。それに加えて、朝廷の混乱と科挙試験における競争率の激増により、官につくことが難しくなり、貰える俸給も減少した。〈経済制度〉

明代中後期において、江南一帯に資本主義が誕生した。市民階級の人口増加と芸術の世俗化がアート市場の拡大をもたらし、芸術に長けた文人たちに新たな稼ぎ口を与えた。同時に、生活が豊になるにつれ、隠者に関する伝説も再び語られるようになり、隠者と名乗る人たちは品性の高い人として慕われていた。

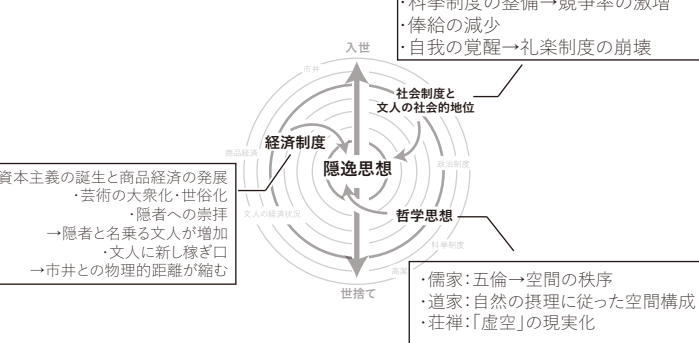


図6.明代の隠逸思想に影響する要素

○まとめ

人々の自意識が強い明代中後期における隠逸思想は**伝統的な隠逸における高潔さを継承したもの、市井との物理・精神的な距離が近かった。**この時期の隠逸は**政治的圧力から逃げるため・売名するための手段としての意味合いが込められ、〈世捨て⇄入世〉の両面性**を持っていた

第3章 対象作品からみる隠逸空間

第3章では、対象作品を網羅的に分析することで、対象時空間における隠逸空間の特徴を分析した。

○資料編

- 文徴明の作品から
 - ・人の活動が描写されたもの
 - ・人の活動を受容できる空間が描写されたもの

を条件に、研究対象となるものを45枚選定して平面図を起こし、画面の要素を整理した。さらに、**〈空間を構成する要素〉〈建築様式〉〈空間の配列と使い方〉**の3つの項目に着目して分析を行った。

○分析

・建築様式

草堂建築を対象とする作品が一番多かった。その原因はとして、多様な哲学思想の発展に伴い、古来の封建制度を基盤とした礼楽制度が崩壊し、「礼」は鬼神を祀る「祭礼」から自分を高める「士礼」へと変化したと考えられる。従って、**鬼神を祀る「明堂」も次第に文人が自分を高める「草堂」へ変わったと推測する。**

・空間の配列と使い方

空間の配列は〈L型〉〈一列〉〈コの字〉〈単独〉〈その他〉の四種類に分類できる。いずれも**主室は文人の活動空間として隠蔽性が一**

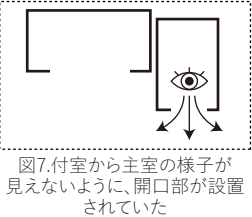


図7.付室から主室の様子が見えないように、開口部が設置されていた

番高く、付室は使い人の作業部屋(お茶の用意など)または書斎など多目的に使われていた。

・空間を構成する要素

空間を構成する要素の中からさらに〈屋内要素〉〈屋外要素〉〈敷地内外境界〉の三つの項目に分けて分析を進める。

〈屋内要素〉

屋内には「機能的な家具」と「装飾性を持つ家具」としての白い屏風が描かれていた。前者は実用性を重要視した移動性の優れたものが多かった。後者は隠者に求められた清康の品質に反するものの、画面での存在感が大きく、荘禅における「虚空の現実化」から由来したものだと考えられる。

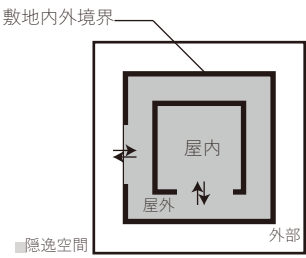


図8.空間の構成要素

〈屋外要素〉

植物は外からの視線を遮るために建物を囲むような形で、または外からのアプローチに植えられていた。さらに、植物の中で竹が一番多く、これは快適な空間を作るためだと思われる。また、敷地内の籬は外部者の物理的なアクセスを阻止するが、物理的な性質を持たないアクセスを許していた。よって、まがきは中心部への侵入を阻止すると同時に、その「神聖性」を強調する役割を持つと考えられる。



図9.『桃園問津図』(局部)

〈敷地内外境界〉

敷地はその周りの山や川からなしたバリアによって、外部から孤立された形で存在していた。一方、〈内⇄外〉をつなぐ橋の利用が強調されていた。

第3章から得た空間構成を図6.に示す。

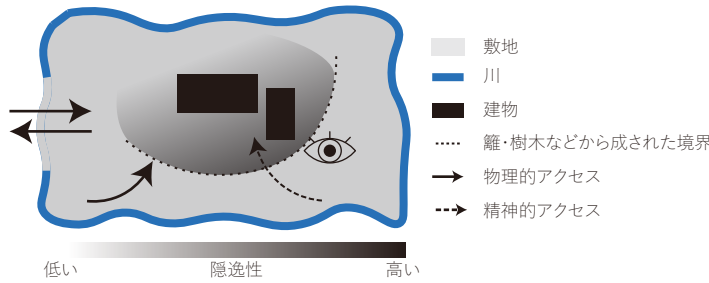


図10.対象作品からみる隠逸空間

第4章 拙政園からみる隠逸空間

第3章では、対象作品を網羅的に考察した。本章では拙政園を取り上げて、隠逸空間の特徴をより大きいスケールから分析する。

手順を以下に示す。

①拙政園とそれにまつわる作品を用いて第3章から得た結果を検証する。さらに、第3章で取り上げた作品は、単一の建物または建物群が対象とされていたが、本章では一つの敷地内に複数ものユニットが存在する場合、どのような様相を示すのかについて分析する。

②『拙政園三十一景図冊』と『拙政園十二景図冊』を比較することで、理想的な隠逸空間の在り方について分析する。

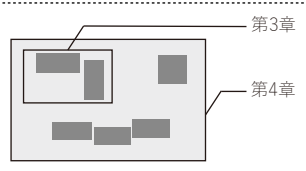


図11.第3章と第4章で取り扱う範囲

○拙政園について

拙政園は明代中後期に建てられた蘇州にある文人庭園であり、後世の改修と拡張により現在は清代末期の姿を呈している。

*名前にある「拙政」は、晋代の『閑居賦』からとっていて、「志を得なかった政治家」を意味する。

○拙政園の変遷と連続性

『王氏拙政園記』と『拙政園三十一景図冊』を参考に、明代における拙政園の図面を復元してみた。(図12左側)建設初期から清代末期に至るまでの拙政園の変遷を以下にまとめる。

- ①建物の数が増え、密度が高くなったのと同時に、明代の簡素なものから清代の建築様式に合わせた豪華なものへと変貌した。
- ②庭園の面積が拡張された。建設初期、すなわち明代中期の拙政園は現存する拙政園の中部に当たる。
- ③建築の様式は変わったものの、それらの配置は地形と水系に沿った明代の空間設計手法を引き継いだ。

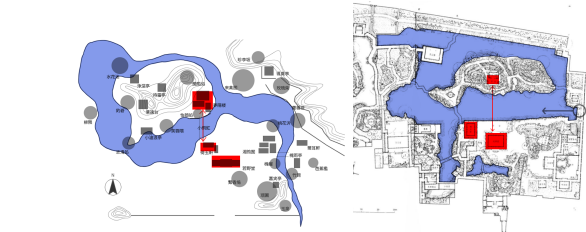


図12.明代拙政園復元図と現存する拙政園平面図の比較

○『拙政園三十一景図冊』と『王氏拙政園記』からみる隠逸空間

〈分析項目の決定〉

庭園全体を描く作品として『拙政園三十一景図冊』は建築内部に対する描写は少ない。よって、以降では空間構成とその利用方法に着目して分析を進める。

〈第3章の検証〉

第3章で得られた結論は拙政園の空間構成に適應されていることを確認した。

〈開放と囲み〉

現存する蘇州の拙政園は全体的に白い塀に囲まれていた求心的な庭園であるが、建設初期の拙政園に塀についての記載は確認されなかった。一方、籬により建物または生産性の持つスポットがユニットごとに囲まれていた。

○『拙政園三十一景図冊』と『拙政園十二景図冊』の比較

〈比較する前提〉

- ①**描写対象の一致**:『拙政園十二景図冊』の創作対象は、『拙政園三十一景図冊』から選ばれたものだった。
- ②**実空間の類似**:拙政園は500年の間少しずつ変貌してきたものの、『拙政園三十一景図冊』が創作された1533年から『拙政園十二景図冊』が創作された1551年の間に大きな改修はされなかった。
- ③**創作動機の違い**:『拙政園三十一景図冊』は商品として客観性が大きいのに対して『拙政園十二景図冊』は主観的な感情が大きかった。比較の結果を以下に示す。

〈視点の違い〉

『拙政園十二景図冊』は鳥瞰図が多いのに対して、『拙政園三十一景図冊』の多くは人の視点から描かれていた。前者の方が想像絵としての性質が大きいことを裏付けている。

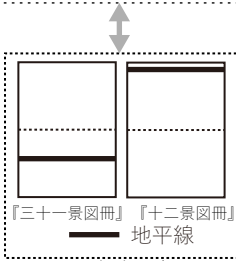


図13.視点の違い

〈空間構成〉

『拙政園三十一景図冊』では、敷地内の建物は籬・山・川・植物などによって囲まれていた。さらに、植物は人の手の加わっていない状態を呈していた。一方、『拙政園十二景図冊』での建物もしくは人が活動する空間は人の手により規律的な空間に整理され、空間全体はより囲包性の高いものとなった。

〈人の活動〉

『拙政園三十一景図冊』と『拙政園十二景図冊』は共に人の活動に注目していた。一方、前者は一人の文人が静坐・思考している場面が多いのに対して、後者ではそれらの場面が二人以上の文人が談笑・喫茶など、社交している場面に描きなおされた。

○まとめ

- ・隠逸空間には**交流の場としての性質が求められ、敷地は全体的に開放的なもの**だった。一方、敷地内の建物はまがきや川・植物により**ユニットごとに囲まれていた**。
- ・各ユニットの周りには人工物と自然物により成された境界が複数存在していた。さらに、**囲まれた空間は求心的なものであり、内側から外側に向かって境界の遮断性が強くなる傾向がみられ、そして橋により打破された**。

- ・各ユニットの配置は敷地の地形・水系に従うものの、ユニットにおいては人の手が加わった**規則的な空間**がより好まれた。

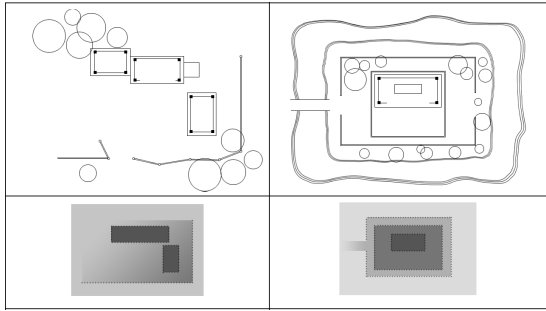


図14.『三十一景図冊・繁香塢』(左側)と『十二景図冊・繁香塢』(右側)の比較

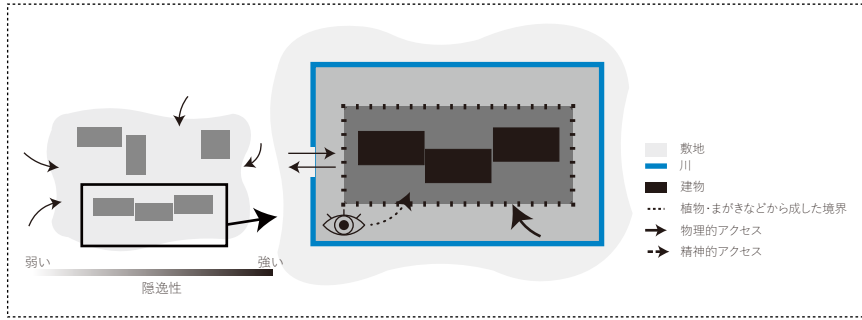


図15.隠逸空間における「世捨て」と「隠逸」

第5章 考察

明代中後期における隠逸は、伝統哲学・教育と新しい社会情勢からの影響を受け、「世捨て」と「入世」の二面性をもっていた。

〈世捨て〉と〈入世〉

古くからの隠逸は「山林」「聖人」「高潔」などのキーワードを連想させるものであった。隠者たちは伝説に登場する仙人を倣い、世俗との繋がりを切り捨て、山の中に姿を隠していた。そのような、**聖人として求められた「神聖性」は主に建物の内装に現れていた**。

一方、隠逸空間における空間び規律性・秩序性と建築様式は、俗世の影響を受けた痕跡がみられる。これは明代における隠逸は、経済・政治・社会制度などの要素からの影響を受け、従来より世俗との**物理的・精神的な距離が近い**ものであったからと考えられる。

〈葛藤〉

ほとんどのユニットの中層部(川の内側・籬の外側)は、植物が植えられてあった。これらの植物は外部からの視線を遮る作用をもつ。一方、文人の集まりだけでなく、市井の人からの直接的なアクセスが可能だった。隠逸性を持ちながら世俗との繋がりが許された中層部は、「**世捨て⇄入世**」の葛藤を受容する領域としての性格を帯びていたと考察する。

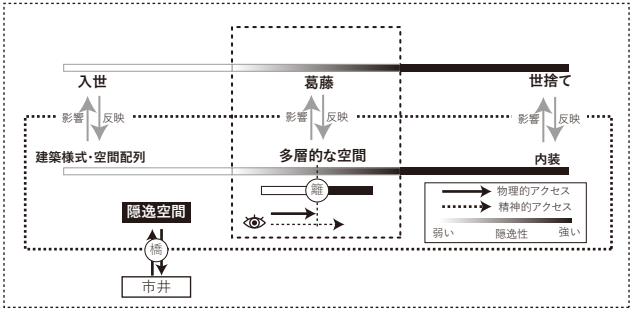


図16.隠逸空間における「世捨て」と「入世」

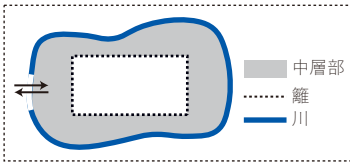


図17.ユニットの中層部

第6章 結論

明代中後期における隠逸思想は、伝統教育と新たな時代背景により〈世捨て⇄入世〉の両面性を持っていた。その両面性は、空間を構成する要素に反映され、多層的な空間を作っていた。

参考文献・図版出典

- ・クレイグ・クルナス『明代中国の庭園文化:みのりの場所』青土社,2008
- ・計成『園治』江蘇鳳凰文芸出版社
- ・周道振『文徵明集』上海古籍出版社,1987.
- ・Wu Hung『The Double Screen-Medium and Representation in Chinese Painting』Reaktion Books, 1996
- ・Sir Ernst Hans Josef Gombrich『Art and Illusion, A Study in the Psychology of Pictorial Representation』,Princeton University Press,1960.
- ・文震亨『長物志』江蘇鳳凰文芸出版社
- ・韋秀玉『古雅空間—文徵明《拙政園三十一景圖》研究』人民出版社,2016,p58
- ・郎紹君『二十世紀中国美術文選』上海書画出版社,1999,p67.
- ・俞劍華『中国画論類編』人民美術出版社,1957,p22.
- ・陳弘緒『寒夜錄』上海古籍出版社,1995.
- ・郭傳其『停雲模楷—關於文徵明与16世紀吳門風格規範的一種仮説』中国美術学院出版社,2012.
- ・李賢『達官支俸疎』
- ・白居易(唐)『贈杓直』・『礼記—大学』
- ・『論語』
- ・李漁(清)『閑情偶寄』1671.
- ・宗白華『芸境』北京大学出版社,1999,p52.
- ・蔣暉『古典園林』古吳軒出版社,2015,p11.
- ・王世貞『弇州山人四部稿』上海古籍出版社,1993,卷131.
- ・葉永『物境与想像—拙政園多緯度空間对比研究』華東理工大学,2019.
- ・錢詠(清)『履園叢話』卷二十,拙政園条目.
- ・『老子・八章』
- ・施紹莘(明)『西余山居記』
- ・江総『修心』
- ・『莊子則陽』
- ・皇甫瑤『皇甫少玄集』外集卷十
- ・周道振『文徵明書画簡表』人民美術出版社,1985.
- ・俞樾(清)『春在堂詩』
- ・番岳(西晋)『閑居賦』
- ・図1-8.10-11.13-17.筆者作成
- ・図9.江兆申『文徵明画系年.図版編』中国民国国立博物館,1976.
- ・図12.(左)筆者作成
- ・図12.(右)『蘇州古典園林』をもとに筆者加筆